

# コンテキストと語義

岡 部 匠 一

## 1. コンテキスト—定位と展望

語の意味の実現は、コンテキストの中で行われるとか、あるいは、コンテキストとは、広い意味での言葉が用いられる状況であるとか言われるが、コンテキストの論は、内外の文献、論考にも見るべきものは少ないように思われる。本稿は、コンテキストとは、どのようなものであり、その個々の具体的型態と機能は、いかなるものであるかを、言語の基本単位と考えられる語義を中心に見ようとしたものである。

まず、コンテキストの一般的規定を、N. Webster と OED の証言から探ることにする。ウェブスターは、「テキスト、あるいは、一節 (passage)、あるいは、一語に先立つて表われたり、あるいは、それらの後に表われ、それらと非常に密接に関連しているので、それらの意味の解明に役立つ話し (discourse) の一部」と説いている。OEDの方は、ウェブスターよりはより簡潔にコンテキストとは、「ある特別な一節、あるいは ‘テキスト’ の直前にあるか、そのすぐ後にあつて、その意味を限定する部分」と教えている。しかし、OED の今一つの定義によれば、コンテキストとは、「それを構成している部分のいずれかとの関連において考えられた一連の章節 (a connected passage) の全構造」でもある。

これら、ウェブスターと OED の三つの定義を漸定的にまとめてみると、a. <コンテキストとは、ある発話、あるいは、テキストの一部と密接に関連し、その当該部分の意味の解明に役立つ、その当該部分の直接前、あるいは、直接後にある部分>である。またさらに OED の第2の定義によれば、b. <コンテキストとは、ある部分との関連において考えられた、ある発話、あるいは、テキストの全構造>でもある。これらの定義をさらに簡潔にすれば、せまい意味では、a'. <コンテキストとは、その意味が実現される部分の前、あるいは後にあつて、その意味の実現を助ける部分>であり、その広い意味においては、b'. <コンテキストとは、その意味が実現される部分を含む、その発話、あるいは、テキストの全体>であるとまとめられよう。前者の狭義のコンテキストとは、邦語辞書の言う「(文章の) 前後関係」に当るものであり、また、広義のコンテキストは、「文脈」という訳語にこめられているものに当ろう。しかし、コンテキストには、今一つの、より広義の意味があることをウェブスターは教えている。すなわち、「コンテキストとは、精神的なものであれ、実体的なものであれ、関連がある周囲の状況」でもある。この言語的でない実在の世界をも含めたコンテキストを、邦語辞書は「情況」の一語に要約している。

以上三つのコンテキストの定義を通観すると、言語材料のみで規定される文章の前後関係や、文脈と呼ばれる、言語内に閉じる狭義と広義の二つの内言語コンテキストと、言語外の実在の世界の状況をも含む外言語コンテキストの三つに分けられる。この三つのコンテキストを図式的にまとめると、① 狭義の内言語コンテキスト： 意味が実現されるある部分の(直)前、あるいは、(直)後にあつて、その意味の実現を助ける発話、あるいはテキストの

一部一文章の前後関係一。② 広義の内言語コンテキスト： 意味が実現されるある部分を含む発話，あるいは，テキストの全体一文脈。③ 外言語コンテキスト： その発話，あるいは，テキストを含む周囲の状況一情況。

しかし，これら三つの定義を，さらに細かく見ると，狭義の内言語コンテキストに対しては，1. <意味が実現される部分>とは，どのようなものであるか，また，2. <意味が実現される部分の，すぐ前にある部分，あるいは，すぐ後にある部分>の型態，および，その大きさはどのようなものであるか，また，3. 意味が実現される部分と，意味の実現を助ける(直)前，あるいは，(直)後の部分の関係は，どのような型態をもち，また，音素と同様，関係概念として表われるこの型態は，どのような機能をもつのか，等が問われねばならない。また，広義の外言語コンテキストに対しても，4. 意味が実現される部分と，その意味の実現を助ける，その<発話，あるいは，テキスト全体>の，意味の規定関係の型態と，それらの型態の機能はいかなるものであるか，が問われなければならない。外言語コンテキストの場合にも同様に，5. ある発話，例えば，‘Fire!’(‘火事だ!’，あるいは，‘射て!’)という発話の意味の解明に必要な，<周囲の情況>の型態と，その情況と意味が実現される発話との，意味の規定関係の分類と分析が要求されよう。

## 2. コンテキスト —Harris の場合—

次に，このようにして提起されたコンテキストの型態と機能の問題への解答を求めて，諸学者の説を見てみよう。まず，最近の構造言語学の研究者についてみると，Harrisは，その<構造言語学の方法>の中で，「資料提供者(informant)の言語研究者に対する答えは，言語コンテキスト(linguistic context)からとりだされた語ではなくて，その資料提供者の立場では全発話のイントネーションをも担った発話全体である」と述べている。このばあいには<言語コンテキスト>とは，明らかに，<発話全体>であり，上に述べた，<広義の内言語コンテキスト>と考えられる。しかも，ハリスは，この発話全体に書かれたテキストでは，不完全にしか表わされないイントネーションや接続の特性をも含めていることが分る。すなわち，この<広義の内言語コンテキストとしての発話，あるいはテキスト全体>は，ある発話が一回的な言行為として実現されるばあいに担う tone-pause pattern をもつことになる。それゆえ，我々は，ハリスのいう言語コンテキスト，すなわち発話，あるいは，テキストの全構造とは，<speech melodie をも含めた全発話>であることを知る。

## 3. コンテキスト —Hill の場合—

A. Hill は，その<言語構造序説>の中で，文の stress pattern が決して一定でないことを述べ，続けて，「文の内容はコンテキストで(in the context)で変化をみせる」と言い，これを説明して，「John went home. は，ふつうは，“Jôhn wênt hôme.”であるが，もしこの文が，“Who went home?”という質問に対する答えならば，“Jôhn wênt hôme.”となるであろう。また，もし，この文が，“Is John on his way home?”あるいは“Is John at home now?”の質問に対する答えならば，文，John went home. の stress pattern は，“Jôhn wênt

hôme.”になるであろう」と具体例を挙げている。それゆえ、Hillのばあいには、〈文 John went home. のコンテクストとは、この文を含む発話全体の一部で、この文に先行する文〉と言えよう。それゆえ、Hillのコンテクストは、ハリスのばあいと異なり、〈発話全体の一部である狭義の内言語コンテクスト〉を指しているものと考えられる。次に Hockett のばあいを見てみよう。

#### 4. コンテクスト —Hockett の場合 (1)

ホケットは、その《近代言語学講義》の中で、「pin という語の始めに起る p 音とはなににか?」と問い、「我々は p を、いつでも全く同じに発音する必要もないし、また、できもしない。我々の言うことが、同一のコンテクストで (in the same context) 表われうる他の要素のいずれかと十分に異なり、意味が異なつた発話を生みだす限りにおいては、聞き手は、我々の発した音を p として聞きとるだろう」と結んでいる。具体例に即して言うと、① This is a pin ② This is a bin の二つの発話において、①の pin の p の音が、この pin と同じコンテクスト、すなわち、②の文において表われうる bin の b の音と十分に異なり、「これはピンです」と意味が異なる発話、「これは箱です」を生みだす限りにおいては、p 音が、帯気の [ph] ではなく、無帯気の [p<sup>h</sup>] でもさしつかえない。それゆえ、ホケットは、このばあいには、コンテクストを、〈ある部分を含む全体、すなわち、狭義の内言語コンテクスト〉として把握しているように思われる。しかし、彼は、すぐこれに続いて、音素の示差的特徴を説明し、「この相関々係の機能的体系の中において、すなわち、我々が、ある一つの言語の音韻体系を扱う時に、我々は、ふつうは、‘speech sound’ という術語を使わない。例えば、我々は、このコンテクスト (in this context) においては、英語の p を音とは言わない。……我々は、このばあいには、英語の p は、‘音素’であるという」と述べている。それゆえ、このばあいには、ホケットは、コンテクストによつて、〈英語の音韻体系の相関々係の枠〉を指していると考えられる。それゆえ、このばあいのコンテクストは、発話の一部、あるいは全体として表われる内言語コンテクストを超える、〈周囲の状況として表われる外言語コンテクスト〉を意味する語として用いられていると解せられる。

#### 5. 構造言語学におけるコンテクスト —総合と批判—

コンテクストの型態と機能の問題への証言を求めて、ハリス、ヒル、ホケットの書についてのは、いずれも、構造言語学の標準的著作として挙げられているということ、いずれにおいても、コンテクストを一つのテーマとしてとりあげて論じていないという理由による。細かいことを言えば、ハリスの《言語学の方法》と、ヒルの《言語構造序説》のばあいには上に見たように、コンテクストという語を本文で使つてはいるが、索引にはあげられていない。この事実は、方法論の厳密さを唱道する構造言語学の研究者にさえ、コンテクストは、「息を吸うのと同じく、識域下の問題になつている」のではないかということを考えさせる。例えば、ハリスの《構造言語学の方法》は、その方法論の精密さをもつて聞えている。著者自ら、序言で、自著を、「残念ながら読んで易しくない」ことを認め、「言語学の単位、お

よび分析の手続きについての全体像をうるためには、一度読んだだけではだめだ」と極言している。また、この言葉を裏づけるかのように、「構造の記述のばあいには、厳密な分析が実験室を使う科学における実験の役割をはたす」と続け、「分析の方法を、一步一步、段階的に説明してゆくことが非常に大事である」と結んでいる。続いて、序論においては、まず始めに、分析の操作のための方法論が説かれ、使用される術語が、一つ一つ定義されてゆく。ところが、問題の‘言語コンテクスト’という語が使われているのは、厳密な方法論の建設の基礎として使われるべき要素の一つ、「発話」の定義を進めている際なのだから、明らかにハリスの‘言語コンテクスト’は、方法論の要素以前の地位と扱いか与えられていないと言えよう。すなわち、ハリスにあつては、コンテクストは、識域下の問題でしかないと言えよう。

ヒルにおいても、コンテクストへの問題意識は、ハリスのそれと、ほぼ同じであると考えられる。彼は、すでに見たように、英語のかぶせ音素 (suprasegmental phoneme) の一つとして表われる「stress patterns の変動は、‘文の内容’が、コンテクストにおかれて (in the context) 生みだされる」と説いている。‘文の内容’が、Fries の言う ‘全体的意味’であるとすれば、ヒルの説は、＜強さアクセントの型は、文の全体的意味が一定でも、コンテクストによつて変動する＞と書きかえられよう。ヒルは、さらに、強さアクセントの型に続いて、single bar juncture (平坦連接) を論じ、「The sîn's rays méet # と The sôn's raise méat # は、それぞれ、ここに表記されているやり方で発話されるならば、この二つの文は、全く区別することはできない。もちろん、これらの文を取り巻くコンテクスト (the surrounding context) が、ふつうは、聞き手に、それぞれの文を、すぐに分らせるようにするであろう。しかし、もつと注意深く話されるばあいには、あるいは、コンテクスト (the context) が解明しないばあいには、第一の文は、The sîn's rays | meet # と表わされ、第2の文は、The sôn's | raise méat # と表わされる形で話される」と述べている。それゆえ、このばあいのコンテクストは、さきに述べた、John went home. の例にみられた、＜発話全体の一部である狭義の内言語コンテクストではなく、さきに挙げたホケットの第2の例、「音韻体系というコンテクストにおいては、英語の p 音は、音ではなく音素である」というばあいのコンテクストと同じく、＜周囲の状況として表われる外言語コンテクスト＞を意味しているものと考えられる。

振り返ってみると、ハリスの場合には、コンテクストが無意識に用いられたのは、発話 (utterance) という術語の定義の際であつたが、ヒルの場合には文においての、強さアクセントの型の変動についての説明の際に、知らずして持ちこまれていたと言えよう。しかし、‘発話’も、‘強さアクセントの型’も、ハリスとかヒルという個人を離れた、構造言語学の基本的要素なり概念である以上、これらの要素の定義や概念の説明に、コンテクストが利用されているという事実は、コンテクスト論が、言語研究の識域下に葬られているべきではないこと、すなわち、contextology が提起さるべきことを要請していると言えよう。

さきにハリスに続いて挙げられたホケットのコンテクストに対する態度は、ハリスやヒルのそれとは、少し異なつて付言したい。もちろん、ホケットも、コンテクストに対しては、その《近代言語学講義》の中で、目次の一項を与えるほどの問題意識は持っていなかつたという意味では、ハリス、ヒルと同じく、ホケットにも、コンテクストは識域下の問題でしかなかつたと言えよう。しかし、《近代言語学講義》のばあいには、ハリス、およ

びヒルのばあいと異り、その索引には、二箇所にもわたって、コンテキストへの参照がなされている。

## 6. コンテキスト —Hockett の場合— (2)

それゆえ、ホケットのコンテキストの態度の検討には、この索引によつて参照されている部分を、先に挙げた4. のばあいの、二つの未索引のコンテキストへの言及の部分とは異なるものとして考えてみる必要がある。

索引部分のコンテキストへの言及の一つは、構文結合について論じた箇所である。「She likes yellow clothes. と、Strong soap will yellow clothes. においては、yellow clothes は、同一の順序におかれた、同一の直接構成素から成っているが、その構造は違っている。第一の文では、その構造は、限定詞＋名詞頭語であり、第二の文では、動詞＋目的語である。しかし、この二つの構造は、yellow clothes 自体の内部では表わされない。起りうるこの種の曖昧さが、コンテキスト (context) によつて除かれるばあいに、我々は、これを、コンテキストによる結合 (linkage by context) と言う」。この場合には、語群 yellow clothesの構文結合の可能な二つのうちの一つが、この語群をも含めた、それぞれの文の中で、この語群に先行する部分によつて実現されると考えられる。それゆえ、このばあいのコンテキストは「意味が実現される部分の前にあつて、その意味の実現を助けるテキストの一部、すなわち狭義の内言語コンテキスト」であることが分る。

ホケットの索引に表われている、今一つのコンテキストへの言及は、代替詞 (substitutes) について論じた箇所においてである。「ある substitutesの指向力 (appositive valence) は、言語コンテキスト (linguistic context) に、それに適する型態を見いださず、非言語的環境 (non-speech environment) に、それを求めなければならないかも知れない。もし、我々が、John put on her hat. というばあいに、her は、この文中においては、指し示すものがない。それゆえ、her の指すものは、外に求めざるをえない。また、我々が John put on his hat. と言うとき、コンテキストによつて、‘彼の帽子’ は、ジョン自身の帽子ではなくて、誰か他の人のものであるかも知れない。そしてこの場合にもまた、his の指向力は、非言語的環境に導くことになる」。この論は、「substitutes の一つである代名詞は、‘言語コンテキスト’、すなわち、内言語コンテキストであるこの文中に指し示すものが求められず、‘非言語的環境’ すなわち、＜外言語コンテキスト＞の中に、この her によつて指し示されるものが求められなければならない」と要約されよう。

## 7. 変形文法とコンテキスト —Chomskyの場合—

次に、構造言語学の一環として、この数年来、大きな期待をもつて迎えられる「変形文法」(transformation grammar) においては、コンテキストに、いかなる位置が与えられているかを見よう。変形文法とは、chomsky によれば、「言語分析の十分に確立された理論を、精密なものにする以上の重大な意図」をもつ「言語構造の型式の一般理論」である。変形文法の標準的研究書は、ハリスの“Co-occurrence and Transformation” Language. 33 (19

57) 283-344. を除けば、チョムスキーの、《文法の構造》と、Gleason の《記述言語学序説》の新版(1961)に新たに補足された、《変形文法》の解説であろう。

まず、チョムスキーの場合には、立論の厳密さをみせて、マルコフ過程や、論理代数の方法までも考察の対象に組みこんで、英語の文の文法性 (the concept of grammatical in English) を論じている。しかし、この‘文法性’の行論の過程に、彼もまた、ハリスやヒルと同じように、コンテキストという語を、次のような形で、不用意に導入している。「“I saw a fragile—”というコンテキスト (context) において、‘whale’ と ‘of’ は、ある話し手の過去の言語生活の経験においては、同じ程度の頻度—ゼロの頻度をもっているかも知れないが、その話し手は、即座に、‘I saw a fragile whale’ は、文法的に妥当な文になるが、‘I saw a fragile of’ は、文法的に妥当な文にはならないことを知る」。また、この少し後で、同じく、文法性の概念を論じて、「Colorless green ideas sleep furiously. というような文は、むりなコンテキスト (a far-fetched context) においては起りうるが、Furiously sleep ideas green colorless. は、決して起らないであろう」と述べている。“I saw a fragile—”のコンテキストとは、＜その意味が実現される部分に対して、その部分の意味の実現を助ける構造全体＞と考えられるから、このばあいのチョムスキーのコンテキストは、＜広義の内言語コンテキスト＞に帰せられる。第2の、いわゆる、むりなコンテキストとしては、例えば、Chomsky would have us recognize the sentence ‘colorless green ideas sleep furiously’ to be grammatical. のようなコンテキストが考えられよう。このばあいにも、その文法的妥当性が問われる‘Colorless green ideas sleep furiously.’ に対して、この部分の意味の実現を助ける全体 (Chomsky would have us recognize the sentence……to be grammatical) という形で、コンテキストが表われていると言えよう。従つて、この‘むりなコンテキスト’も、＜広義の内言語コンテキスト＞に含められることが分る。しかし、ここでも我々の注意を魅くのは、ハリス、ヒルと同様に、チョムスキーにとつても、コンテキストは、識域下に沈められ、問題に型式化される以前の無定形の状態に止められていることである。すなわち、「言語の意味的、および、統計的研究の重要さと意義は認めるが、これらの研究は、文法的発話を規定する問題には、なんらの関連ももたない」と言つた時、チョムスキーは、文法性の決定の場として、必然的に発話の意味と結ばれてくるコンテキストを、自分が使つていたことを忘れていたのである。

## 8. 変形文法とコンテキスト —Gleason の場合—

次に、変形文法におけるグリーソンのコンテキストへの態度を見よう。グリーソンは、その変形文法を説明して、a. John is writing a letter. が、b. John isn't writing a letter. に変えられるばあいに、「a. の否定が b. というように、意味によつて記述されることは、あまり正確でない」と言い、続けて、「上のような変形は、構造的に、すなわち、要素を附加したり、要素を配列し直したり、あるいは、要素の型態を変えたりすることによつて記述できる」と述べている。しかし、彼は、変形規則の7. から8. に移るばあいを説明して、「ステップ8の選択は、コンテキスト (the context) によつて部分的に規定される」と述べ、ハリスや、ヒル、チョムスキーと同じく、無定義の術語を、その方法論の論述の中に持ちこんでいる。このコンテキストという語が持ちこまれているステップ8の変形の一つは、「C—Z。

in the context NP sing」と表現されている。このステップ8は、ステップ7を、「NP sing + C + be + ing + V + NP sing」を「NP sing + Z<sub>3</sub> + be + ing + V + NP sing」に変えるものであり、最終的には、Terminal string, ステップ14の John + Z<sub>3</sub> + be + ing + write + a + letter + φ を経て、John is writing a letter. を生み出す変形法則でもある。それゆえ、ステップ8の「in the context NP sing」は、〈ステップ7 (NP sing + Z<sub>3</sub> + be + ing + V + NP sing) の最初の「C → Z<sub>3</sub>NP」(名詞 or 名詞句) が単数のばあいには、be は is に変えうる〉ことを意味している。それゆえ、このばあいのコンテキストの意味は、〈全体 (NP sing + Z<sub>3</sub> + be + ing + V + NP) の中の一部、C の型態 (contextual concord) Z<sub>3</sub> を規定するものは、最初の NP の型態である〉と考えられる。それゆえ、このグリーンソンの変形文法のばあいのコンテキストは、〈狭義の内言語コンテキスト、すなわち、その意味が実現される部分 (C - Z<sub>3</sub>) との関連において考えられた全構造の一部 (NP sing)〉と考えられよう。

### 9. 英語意味論とコンテキスト —Fries の場合—

構造言語学の研究者の中で、ハリス、ヒル、チョムスキー、グリーンソン等と異なり、問題意識をもつていたとまでは言えないが、コンテキストは問題にならないと言つたという意味ではコンテキストの存在を認めていたのは、先に挙げたホケットを別とすれば、フリースであろう。彼は、その論考、《意味と言語の分析》の中で、構造的意味を論じ、「強勢のストレスとイントネーション、および、社会文化的状況が同じであるとすれば、There is a book on the table. と Is there a book on the table. の二つの文の意味の差異は、語彙的要素の配列の特性によつている。それゆえ、構造的意味は、いわゆるコンテキスト (context) という漠然としたものではない」と述べている。

### 10. 文芸批評とコンテキスト —Richards の場合—

オグデンと共に、《意味の意味》の共著者として知られている文芸批評畑のリチャーズはその《教授法における解釈》において「語のコンテキスト (a word's context) とは、発話の中で、その語を取り巻いている語(群)、および、その語の解釈を決定する他の同時的記号である」と述べている。このリチャーズのコンテキストには、〈発話の中で、その語を取り巻いている語群として表われる狭義の内言語コンテキスト〉と、〈その語の解釈を決定するのに役立つ、その語と同時的に存在する、その語をとりまく外界の事象、すなわち、外言語コンテキスト〉の二つの概念が含まれている。

### 11. 言語心理とコンテキスト —Bryant と Aiken の場合—

ブライアントとエイケンには、《英語の心理》において、《怠惰とコンテキスト》の一章を設け、「英語におけるだらしなさを助長する最大のものは、コンテキスト (context) である」と述べ、続けて、「このコンテキストという語 (this word context) は、言語の研究において基本的なものである。なぜならば、いかなる語も、それ自身意味をもつことはなく、他の

語と結びつけられて始めて意味をもつ。文だけが意味をもっているのだ。dog とか、hide のような語は、簡単に規定できるようにみえる。しかし、事實は、これらの語を規定する人はこれらの語が名詞か動詞かというようなことを言うだけでさえも、まずコンテキストを必要とするであろう。意味を規定するのはコンテキストであり、個々の語の意味は、コンテキストによつて左右される。」と説いている。このブライアントとエイケンの場合には、コンテキストは、フリースのように‘漠然としたあるもの’ではなく、＜語の意味を規定し、個々の語の意味が、それによつて左右される、言語研究における基本的なもの＞である。そして、＜語は、他の語と結びつけられて始めて意味をもち、＞また、＜文だけが意味をもっている＞のだから、この二人の研究者が考えているコンテキストは、＜意味が実現されるある部分を含む発話、あるいは、テキストの全体として表われるコンテキスト、すなわち、＜広義の内言語コンテキスト＞であることが分る。

## 12. ソヴィエトの言語学とコンテキスト

### —レホルマツキーの場合—

最後に、ソヴィエトの言語研究者、レホルマツキーのコンテキストの論を見よう。レホルマツキーも、ブライアント、エイケンと同じく、その＜言語学概論＞で、＜コンテキストと省略＞の一章を設け、次のように論じている。「言語にみられる語の大部分は、多くの意味をもっているが、我々は、話す際には一つの意味だけを理解する。これは、話すばあいには辞書におけるような切り離された語ではなくて、語群全体が問題になるからである。このばあいには、語は、他の語と結びついて表われ、また、話の情況と結びついて表われる。このような語の環境は、コンテキストと呼ばれる。コンテキストには、言語コンテキストと、事象コンテキストがある」。彼は、さらに言葉を続けて、言語コンテキストと、事象コンテキストを詳説している。「言語コンテキストとは、その語を取り巻く、あるいは、その語に伴つて表われる、その語に必要な一つの語義を与える語（群）である。……事象コンテキストとは、環境、すなわち、話の場面である。誰が、どこで、いつ、誰に、なぜ話すか等である。事象コンテキストが特に重要になるのは、代名詞的な語の理解のばあいである。代名詞的な語に対しては、言語コンテキストは、ほとんど規定力をもたないからである」と述べている。

## 13. コンテキストの型態 —諸説の総合—

諸家の説を通して見てきたように、コンテキストには、二つの内外言語コンテキストと、一つの外言語コンテキストがあることが分る。また、これら、三つのコンテキストのいずれにおいても、その中には、その意味が実現される部分と、その意味が実現される部分の意味の実現を助ける部分との、二つの要素がみられることが分る。ここで論述の便宜上、構造言語学の直接構成要素分析の用語を借り、その意味が実現されるある部分を、＜被規定素＞と名づけ、被規定素の意味の実現を助ける部分を＜規定素＞と名づけておこう。すると、二つの内言語コンテキストと、一つの外言語コンテキストは、それぞれ、次のような形でまとめられよう。



- a. 狭義の内言語コンテキスト： 被規定素の（直前），あるいは，（直）後に存在する規定素（発話，あるいは，テキストの一部）。
- b. 広義の内言語コンテキスト： 被規定素を含む規定素全体（発話，あるいは，テキストの構造全体）。
- c. 外言語コンテキスト： 被規定素をとりまく環境，すなわち，その言行為に参加する人間をも含めた話し場面。

Journal of the Faculty of  
Liberal Arts and Science, Shinshu University  
1964, No. 14, pp.

### Summary

The concept 'context' is said to be basic in the study of meaning. However the present writer's search and scrutiny of this concept in the studies of structural linguists has revealed that those structuralists whose methods or procedures of operation aspire to those of the exact science are ignorant even of the existence of 'context'.

Out of casual uses they have made of the word 'context' three different classes of contexts are elicited. They are :1. narrow linguistic context (the part or parts in the utterance which determines the meaning of the given part. 2. wide linguistic context (the whole part or structure in the utterance which functions as determiner of the meaning of the given part or parts) 3. extra-linguistic context (speech situation or environment in which speech act takes place).